

「夜の街の路上で男娼に扮しているところを、」

シキに見つかってお買い上げされるアキラ。ヽ

強い力で二の腕を捕まれ、引きずられるようにして連れてこられたのは、アキラが籍を置く店ではなかった。路地を二つ戻った場所、ビルとビルの間ひっそりと佇む、古い洋館の趣がある古めかしい外観の建物を、アキラはこれまで気にとめたこともなかった。昼の間は博物館として営業していると聞かれても不思議のないもので、夜である今はしんと静まりかえっている。

だが玄関をくぐると、そこは洋燈の仄かな明かりに浮かび上がるエントランスホールだった。床には、ペルシア絨毯がひかれ、細かな細工のなされた黒檀の棚の上には、青磁の壺が飾られている。頭上は何種類もの花の日本画を収めた格子天井だった。革張りのソファはくすんだ金の鉾が打たれ、その上に錦糸で織られたクッションが、裾から金糸の房を垂れている。それを英国風の、深い色合いの木材をふんだんに使った、重厚だが上品な細工彫りの施された壁や柱が纏め上げていた。

和洋折衷どころではない。アジアを主とした様々な文化圏から、その粋を集めて置いたような場所は、それでいて不自然さ

はなかった。だが、部屋そのものはさして広くはないはずなのに、奥の扉がどこか異国に繋がっているのではないかと思わせるような、底知れなさも併せ持っている。

左右にろうそくの灯る燭台の載った受付には、老紳士が一人佇んでいた。その相貌には、色濃く西洋の血が現れている。彼はシキの姿を見るや、どうぞ、とだけ告げて鍵を一つ差し出した。部屋の番号だけが刻印された、シンプルな銀の鍵だった。

エレベーターは一階に止まっていた。壁の代わりに蔦の絡んだような華奢な格子に囲まれた箱は、まるで美しい檻のようだった。ボタンはない。代わりに鍵穴が並んでいた。シキが先ほど渡されたルームキーを差し込むと、檻の格子扉が静かに閉まり、エレベーターはゆっくりと上昇を始めた。

△中略。翌日。ヽ

「来い」

たった、一言。

声が、命令が、芯に届く。意志の力が働く前に、アキラの脚

は動いた。

エントランスを抜ける。背後で、檻が閉まるような音を立ててエレベーターの格子扉が閉じた。そこに肩をつかまれて押しつけられる。上昇が始まる。足を割り開くようにして、シキの膝に内腿をなであげられた。

「……………」

力が抜けそうになる足で強く床を踏みしめる。熱に溺れそうになつて、空気を求めるように上向いた先で、赤い瞳に絡め取られた。見入られる間に、唇を唇でふさがれる。

くちづけと呼ぶには獯猛すぎた。肉欲を引き出すあからさまな目的に満ちていた。下唇を柔らかな唇で包まれ喰まれ、齒の裏側の敏感な上顎を尖った舌先でくすぐられ、喉の奥に逃げ込ませた舌を、追われ誘い出され甘咬みされた。助けを求めるように伸ばされたアキラの手は、空をかけた後シキの軍服の背に爪を立てた。縫らなければ、どこに落ちていくかわからなかった。

自分の体が、びくびくと何度か痙攣したのがわかった。頭が痺れて、真っ白に染まる。あるいは赤に。さらには黒に。

唇が解放される。シキの顔が離れてゆく。力が抜けたアキラの体は、エレベーターの格子の壁をずると滑り落ちた。何度も激しく達した後のように、足に力が入らなかつた。せわしない息の合間に、目の前に君臨する男を見上げる。シキは、両

端を上げた自らの唇を舐め上げていた。薄い色の唇の間から現れた舌はひどく艶やかな色をしている。肉食の獣の舌なめずりにも似ていた。とらえた獲物の、どこから引きずり出して食らおうか——どう弄んでやろうか、そう考えている顔だった。淫らだった。抱き上げられ部屋に運ばれる間、アキラは自分を喉元に食らいつかれて巢穴に引きずられてゆく、瀕死の動物のようだと思つた。

だが想像に反して、アキラをベッドに下ろすシキの動きは丁重だった。上半身を軽く起こした姿勢になるよう、背中にクツシヨンを入れられる。死にゆこうとしている生き物の命を、一瞬でも長引かせようとしているようにも感じられた。

子供にするように額に優しく口づけられる。まさかこのまま、放置する気なのではないかという思いが一瞬巡つて、アキラは腕を伸ばす。ありえることだった。過去何度かあったことだった。こんなにも切羽詰まっていたことはなかつたが。

肩を緩く掴まれて、シキは微笑したようだった。アキラの瞳の端に、頬に、柔らかな唇が落とされる。ほつとして体から力を抜くと、自分よりも一回り大きい体が、膝の間に滑り込んでくる。その重みが、心地よかつた。首筋に吸いつかれて、期待に満ちた甘い息を漏らしてしまう。

軍服の前釦がはずされ、シキの大きな手がワイシャツ越しに体を撫でた。膝の間にシキの体があるというだけで、揺れそう

になる腰を必死でとどめる。前のものを擦り付けたのか、それとも、——後ろに入られたもののせいなのか、わからなかった。

「見せてみる」

命じられる。抵抗する余裕は最早なく、是非もなく従った。

タイをはずし、ワイシャツを脱ぐという発想に至る余裕はなかった。アキラの手はすぐベルトにかかる。震える指で金属音をたてながらなんとか外すと、ワイシャツの裾を引き上げてパンツの前を開いた。おさえつけられていたアキラの雄が、下着の中で身を起こす。

「ひどいな」

「……………」

シキの含み笑いも、今回ばかりは否定できなかった。下着どころか、その上につけていたシャツの裾まで濡れていた。ほとんど、先ほどのエレベーターの件のせいだった。やはり、達していたのかもしれない。

腰を上げるようにして軍服の下を腿の半ばまで下ろしてから、下着も同じようにした。バネ仕掛けの玩具のように、中心が跳ね起きた。濡れた鈴口から溢れる液体には、白いものも混じっている。

「足を立てる」

言葉の内容をほとんど考えることなく、声に従う。するとシキ

が手を伸ばした。指先にひっかけたのは、アキラの内側で今も震え続けている、熱の固まりと化したローターのコードだった。

「あ……ッ！」

何の気遣いもなく、それが引かれる。アキラの体が跳ねた。ブーツを履いたままの足先が、弾みで蹴り上げられてシキの髪を揺らした。

「い、っ、あ、……ッ！」

拒否の言葉が声にならない。それはスイツチを切られることもなく、小さく振動しながらずると、敏感になったアキラの中を這い出ていく。その通り道を収縮させてしまうがゆえに、時に戻りながら。

電気的な振動の音が急に大きくなった。引き出されたローターが、顔の横に置かれていた。

「……………」

後腔が熱を持って痺れている。ぶるりと体が震えて、また新たな体液が、屹立から滴り落ちるのを感じた。

「だらしがない」

冷えた視線で見下ろして、シキがつぶやく。すすり泣くような息の音を返すアキラの、屹ち上がったそれを、シキの大きな手が包み込んだ。

「……………」

上下に擦られる。久方ぶりの直接的な快感に、腰が震える。

「……っ、く、……ん……!!」

悦楽に溺れそうになりながら、どこかで、そのシキの行為を信じられない自分があるのをアキラは感じた。もしかしたら、途中で止められるのではないか。達する直前で動きをやめられて、何か酷く耐え難いことを強いられるのではないか。

そんなアキラの思考を読みとったかのように、シキは軽く笑うと、アキラの汗ばんだ額から灰色の前髪をよけた。指先はそのまま頬にかかった髪をとらえ、かきあげるようにして耳の後ろに運ぶ。タイを緩めワイシャツの釦をいくつかはずして、露わになった首筋に、シキが再び顔を埋める。唇ではむようにして耳の下までを舐めたかとおもえば、同じ場所に走る動脈を食いちぎらんとばかりに噛みついてくる。

「……っ」

その動きはまるで、たとえば二人きりの雨の夜に、別段なにとすることもないのにはじまる行為に似ていた。躑のためでも、支配のためでもない、目的もなく体をつなぐときの。その行為をどう理解すればいいのか、アキラにはいつもわからなかった。わからないまま、シキに問うこともしなかった。それが余りにも、心地よかったのだ。

ワイシャツの脇腹を撫でおろされ、腰骨の形をなぞられる。戯れに、かするように膺のピアスに触れられて、アキラは達した。その寸前、背中を丸めるようにしたとき、シキの腕に抱き

込まれた。なにも考えずに、目の前にあった軍服の胸に額を押し当て、頬をすり付けて、シキの香りの中で小さな声を上げてアキラは痙攣した。息がある程度落ち着くまで、シキはそのままいてくれた。主の匂いを吸い込みながら、アキラはまだ足りない、とぼんやりと思った。実際、シキの手に包まれたものは、放った後も、まったく萎えていかないのだった。